
ドラゴンクエスト.....ですよね？

ブレイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト……ですよね？

【Nコード】

N1017BA

【作者名】

ブレイド

【あらすじ】

ある朝、目を覚ましたら目の前には某人気ゲームの代表的なモンスターである青いプルプルしているあいつがいた……でも此処何の作品なのかさっぱりわからん

0話 夢……ですよね？（前書き）

初めまして、私はブレイドと申します。

この度がにじファン様での初投稿となります。拙い文章ではありませんが、どうか暖かい目で見守ってくださいれば幸いです。

それでは ようこそ、ファンタジーあじえない世界へ

〇話 夢……ですよね？

夢 それは幻覚のようなものでまるであたかも現実のようにすら感じる時もある人間が眠りに就いている時に見るもの。

たしかレム睡眠とノンレム睡眠というものが関係しているとテレビで見たことがあるが、詳しくは思い出せない。だが今言えることは俺、鈴木^{すすき のぶなが} 信長は今夢を見ているのだという自覚だけだ。

「ぴ、ぴぎい〜！」

夢を夢と自覚するのは難しいだろうが、流石にこれは夢だとはつきりと言える。腕に伝わる感触や振動がやたらとリアルに感じるけど、夢とはあたかも現実のような幻覚なのだからこれもそうなのだろう。

「ぴぎいいいいいい！〜！」

耳がキーンとするが、これも幻聴なのだろう。

最近の夢というのは本当に現実みたいだ、はっはっはっ。

「ぴい〜……ぎいいいいいいい！〜！」

ガブリ。腕に強烈な痛みが走るがこれも幻痛なのだろう。腕の皮が千切れそうな位痛いのが直ぐに消えてなくなるだろう……。

……………って、

「いったいわああああああああ！！」

腕を思いつき振り振って腕に噛みついた“生き物”を剥がそうと試みる。するとあっさり腕から離れた“生き物”は器用に着地すると俺の方を見上げてきた。

「ガLLLLLLLLL」

愛くるしいボディとは裏腹にいつちよ前に野生の生物独特の威圧感を放っている眼前の青くてプルプルしている生き物に俺は思わず後ずさりしてしまった。

「くっそ！ 夢の癖になんだってんだよ！？」

噛まれた腕は今も赤く腫れておりちよっと血も滲んでいた。これは本当に夢なのか！？

夢だとしたら相当性質が悪いぞ！

「ガLLLLLLLLL」

「……やるうつてのか？ 言っとくが俺は中学まで剣道やってたんだぞ」

今は木刀すら持っていないので剣道をやったなんて全く関係はない。ただ自分はそういう経験を持っているという自信を持ちたかった。そのための鼓舞的な意味を込めて言ったのだが目の前の“生き物”には全く効果はなかったようだ。というか耳つてあるのかこいつ？

「はあ、どうしてこうなった？」

目の前にいる夢の中の生き物……いや、もう夢とか言っていていられない。これは現実だ。痛む腕も、あいつから感じる威圧感も夢なんかでは断じてないリアルな体感だ。

「なんで俺は“ドラクエのスライム”に襲われてんだよちくしよお
おおおおおおお！！！！」

「ぴぎゃあああああああ！！」

高々に声を出すと同時にスライムが俺に襲いかかってくるのを見たのが、意識を失う前の最後の光景だった。

ちくしょう、夢であってくれよ……。

0話 夢……ですよね？（後書き）

この度は私の拙作を読んでいただき、誠にありがとうございます。
0話、プロローグとなります話はいかがでしたでしょうか？ 短いながらも楽しめたと思う方が一人でも居られたなら今後の励みと致します。

次回より物語を進行していきます。今後の展開の構想は練っているので、しばらくは安定した更新速度（週に3、4話位）を保てると思います。今後もその速度を保つよう頑張ります。

1話 ドラゴンクエスト……ですよね？（前書き）

ブレイドです。この話より物語が進行していきます。主人公のやきもきとした心情を上手く表現出来れば良いのですが……

1話 ドラゴンクエスト……ですよね？

「いつてえ……あんにやる至るところ噛みついていきやがったな？」

スライムにボコボコにされてから暫くして、目が覚めた俺に訪れたのは体中に走る痛みの数々だった。

気を失う前は腕だけだったそれは今では足やら顔やら至るところがジクジクとする。鏡なんかがあったらそれはそれは見事な歯型がついてるだろう。立ち上がることは出来たが、動く度に全身に痛みが走るのを感じて思わず顔をしかめてしまう。

いくらなんでも怒りすぎだ。いきなり力一杯抱きしめたのは悪かったけど此処までひどくはしてないぞ……。

「にしても……スライム、だったよな？ ドラゴンクエストの。」

どうなってるんだよ？ 俺は確か自分の部屋で寝てた筈だぞ」

それが目を覚ましたら目の前にスライムがいて、あのプルプルした目で俺を見ていたわけだ。びっくりして思わずスライムを抱きしめちゃったよ。なんで抱きしめたのかは俺にも分からないけど。

「本当に、夢じゃないんだよな？」

ポツリと零したつぶやきに答えてくれる者は誰もいない。それこそさっきのスライムでもいればマシだったのだが今は近くに何もいないのだ。鬱蒼と生えている木々の葉を風が揺らす音があったという間に俺のつぶやきを掻き消してしまい本当に俺は今一人ぼっちなの

だと思い知らされた。

「おい……おい誰かいないのか！ 誰でもいい！ 誰か、誰か返事をしてくれよ！！」

痛む体を無視して俺は森の中を走った。誰か人はいないか、どこかに家は建っていないか、藁にもすがる思いで木々の間を抜け、藪を抜け、獣道をずいずいと突き進んでいった。

しかし、家はおるか人っ子一人見当たらない。どこまで行っても辺りは森、森、森。景色すら変わらない様子に俺は近くの木の根に腰掛けた。

「だれか、だれでもいい。だれかいないのかよお……」

どんどん涙声になっていっても、誰も答える者はいない。俺はずっと一人なのか？ そう考えていると目の前の藪が突然ガサガサと音を立てはじめた。

バツと顔を上げ、誰か来たのか！ と希望を持った俺の目の前に現れたのは人ではない。青い体にプニプニボディを持つ生き物……さつき俺の全身を噛んでいった奴と同じスライムだった。

「なんなんだよ……何なんだよ！」

画面の向こうで見慣れたあの顔だが、今の俺にはスライムが俺を嘲笑っているようにしか見えない。遂に堪忍袋の緒が切れた俺は近くにあった木の枝を拾い上げヘラヘラとしているスライム目がけて大きく振りかぶった。

「ぶっ、飛べえ！」

大きく横薙ぎに振った木の枝がスライム目がけて振るわれた。
しかしスライムはというと生意気にもジャンプして俺の横薙ぎを避けてみせた。……スライムの癖に！

「避けてんじゃ、ねえ！」

「ぴぎい!？」

スライムが着地したのに合わせて蹴りを入れると今度はしつかりと命中し、足にサッカーボールを蹴ったような感触と共にスライムが宙を飛んだ。ざまあみろ、と内心で零して少しだけすつきりした。

「ぴ、ぎいいいい」

しかし今度はスライムの方がその表情を歪めて俺を睨んできた。俺に蹴っ飛ばされたのが相当ムカついたらしい。だが、俺もまだまだやり足りないと思っていた所なのでスライムがやる気なのを見てむしろ好都合だとすら考えている。

ゆっくりと木の枝を構えてスライムと向かい合う。剣道の構えなんて二年振り位だが意外と体は覚えているものなんだな。

「……こいよ」

「ぴぎやあああああああ！」

「おっ、せえ！」

飛びかかってくるスライムにタイミングを合わせて木の枝を振るう。するとさつきとは違いスライムに叩きつけるような形で木の枝が命中し、スライムは地面に派手に叩きつけることが出来た。これ

は蹴り飛ばした時以上の痛さだろうなと考えていると当のスライムはヨロヨロと立ち上がった。

「結構良い感じに入ったと思ったんだけどな。やっぱ木刀とかじゃないと駄目か」

「びぎい……」

しかしそれでもスライムは随分と弱っているようではずると言うような形で俺から逃げようとしている。普段の俺なら見逃しても良いかと思うのだが、今の俺にはそんな寛容な心は持ち合わせてはいない。大人しく往生しやがれということ、今度は木の枝を高くと振り上げる。剣道でいう上段の構えである。

「これでトドメを刺してやる　おら！」

瀕死のスライム目がけて上段から力一杯木の枝を振り下ろした。しかしスライムも必死なのか先程までのヨロヨロした様子から一転素早い動きで近くの藪の中に飛び込んだ。……逃げられたのだ。

「ああ！？　くそっ、逃げんなこら！」

とつさにスライムの飛び込んだ藪に近寄るも鬱蒼と生い茂っている藪の中で小さなスライムを追う事は不可能だ。

「ちつくしよあー……スライムに逃げられるなん「あっははははははは！　おっかしー！！」て？」

いきなり真上から甲高い笑う声が聞こえてきた。まるで腹の底から笑っているかのようなその声。俺は咄嗟に顔を上に向け、目をぐ

るぐると動かして声の主を探す。すると　　いた。近くの木の枝に座る一人の少女が。

やっと人に会えた。そんな喜びもつかの間で俺はすぐに少女の容姿に目を奪われた。目尻に涙を浮かべ、口元を手で隠す女の子らしい仕草に、ではない。日本ではまずお目にかかれない若草色の長い髪。少女の横顔に普通お目にかかることはないであるう長い耳。俺はその姿から少女が何なのか、知らず知らずの内に声に出してしまった。

「ドラクエの、エル、フ……?」

スライムだけなら兎も角、どうやらここは本当にドラゴンクエストの世界のようだ……。

1話 ドラゴンクエスト……ですよね？（後書き）

1話 ドラゴンクエスト……ですよね？ をお読みいただき誠にありがとうございます。

如何でしたでしょうか？ 突然変な世界にやってきてしまった主人公の不安定な心情を頑張って表現しようとしてみました。実際に異世界にいきなり送られたら誰でも心が不安定になってしまうのではないのでしょうかと思い、こういう表現といたしました。

さて、最後に登場した少女、彼女は一体何者なのか？ 彼女の存在は信長にどんな影響を与えるのか

次回、「エルフ……ですよね？」をお楽しみに！（次回予告つて、要りますか？ 個人的にはノリで入れているのですがw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1017ba/>

ドラゴンクエスト.....ですね？

2012年1月2日11時47分発行